

## 西田幾多郎・全集未収載遺稿（一）

西田 幾多郎

## 私の主意主義の意味

私はまだ何主義といふ様に自分の考が定まつた訳ではなく、又さういふ風に定めるのが善いか悪いかは問題である。併し私は所謂主知主義よりも主意主義に傾いて居ることは事実である。私は私の主意主義の意味を少し明にして置きたい。

普通に意志と云へば、意識現象の一種と考へられ、而も意識現象の中で、最も後に発達する意識現象と考へられる。かゝる意識現象がすべての意識現象の基であるのみならず、實在の根本的形式であるといふのは、受け入れ難いと考へられるのは無理ならぬことである。

併し現に心理学上、主意主義を取る人は多いであらうし、又今は却つてその方が心理学の大勢であると云つてよいかと思ふ。ヴントは自分でどれだけ實際の説明に主意主義を用ゐて居るか知らぬが、自分は主意主義であると明言して居る。勿論、心理学上の主意主義と云つても、所謂意識的意志と云ふものがすべての意識現象の基であると云ふのではない。唯すべて意識現象は知覚の如きものでも衝動的であつて、所謂意識的意志といふのは、意志の動機の衝突より現れる現象と考へるのである。

私の主意主義といふのは心理学で云ふ如き主意主義ではない、カントの認識論の立場といふものを十分に顧慮した上の主意主義である。無論、私は心理学の上でも主意主義を取らうと思ふものではあるが、私の主張するのは哲学的な主意主義である。カントはすべての表象に伴ふ「私が考へる」といふ純粹統覚を、すべての知識の成り立つ基として居るが、私は「私が考へる」といふ基に「私が意志する」といふことがあると思ふ、純粹統覚の根柢に純粹意志があると思ふのである。純粹意志は純粹統覚よりも深くして且つ広い、後者は前者の中に含まれ得ると思ふのである。私は斯く考へることによつて思惟と直観との内面的結合を明にすることができ、之によつて思惟の範疇と直観の形式との結合を明にし得るのみならず、知識の形式と内容との結合をも明にし得ると思ふ。何となれば、意志的行為といふのは客観界を主観化することである、主客の合一を意味するからである。カントの云ふ如く我々の客観的知識の世界が思惟と知覚との結合によつて成立するものとするならば、かゝる結合の根柢に意志の形式がなければならぬ。私は此の如き考から意志といふよりも行為と云つた方がよい様に考へる、その方が客観的な意味を一層能く表はし得ると思ふのである。

私の主意主義といふのは、因果律の立場に於て意志を原因と考へるのではない。私は知識的対象界の根柢に動的統一を見出すことが意志することであると考へる。物が欲求の対象となる時、既に我々は意志的統一の立場に立つて居るのである。意志の立場は知識の立場よりも高次的であつて、知的対象界に於ては意志的現象を求めるときはできぬ。意志は対象化することはできぬ、対象化すれば意志ではなくなる。自覚とか、意志とかいふものが幻覚か錯覚かに過ぎないと云ふならばとにかく、然らざれば知識以上の立場といふものを認めねばならぬと思ふ。私はフィヒテなどの様に、知識成立の根柢に意志を認めるものである。

或は私の云ふ如き意志は、普通に自己の欲求を中心として考へる意志と異なると云ふかも知れない。併し普通に小さな自己を中心として考へて居る場合でも、我々の自己はその見て居る世界の外に立つて居るのである。而して我々

が之を意志の対象とすることは、之を動的統一の立場に於て見ることである。無論我々の自己は無限に深く大きなものであるから、此の如き意志に対して外に無限に広く大なる純知識的な客観界と思はれるものがあるであらう。併し我々は又意志の立場に於て何処まで「も」動的統一の立場を進めて行くことができるのである。動的統一の立場の進むだけそれだけ客観界を主観化することができるのである。

我々の意志といふ現象が時間上後に発達するからと云つて、主意主義に反対する人があるならば、それは意志を単なる知識対象界に映して、因果の範疇に当嵌めて考へて居るのではないかと思ふ。併し前に云つた如く我々の意志の自覚が所謂知識の範疇以上に出づるものとするならば、私は意志の立場に於て知識以上の世界を見ると考へねばならぬ。而して私はカントが知識は経験と共に始まるが、経験から生ずるのではないと云つた様に、意志の自覚は時間上知識の後に現れるかも知らぬが、知識から来るのではないと云ひたい。意志に対しても与へられるものは求められたものでなければならぬ。而して意志が知識より一層深いものであるとすれば、その対象界も知識の対象界より一層深いものと考へねばならぬ。此処に我々の意識現象を衝動的と考へる心理学的主意主義に哲学的意味を与へることもできる。

体験といふのは知識でないと云ふのはカント学者の能く云ふ所である、認識以前としてそれには立ち入つてはならぬと考へられて居る。併しかういふことを主張する人に対して、私は先づ認識論といふ学問は如何なる認識の範疇によつて成立するのであるかを尋ねて見たい、知識を反省する知識は如何なる立場に於て可能なるかを聞いて見たい。私は知識以上の立場といふものが認められて、知識の成立を論じ得るのではないかと思ふ。私はかゝる立場を作用の立場、即ち意志の自覚の立場と考へる。哲学的知識は自己が自己を反省する、或は意志が意志自身を反省する自覚の立場に於て成立すると思ふ。それは知識でないと云はれるかも知らぬが、それでは知識成立の範疇を論ずる認識論は知識でないのであるか。或はかういふ知識の一般的妥当性が問題となるかも知れない。併し私は超越的認識

主観によつて知識の客観性が立せられる如く、超越的意志主観によつて、かゝる意味の意識の客観性が立せられると思ふ。意志には経験内容が一致せぬから、意志の要求はポスチュレートに過ぎぬとも考へられるが、経験の客観的要素と考へられる感覚といふ如きものも単なる所与ではない、構成せられたものである。意志の対象界に於て感覚に相当するものは衝動であると云ひ得るであらう。

それで私の主意主義といふのは意志を原因と見るのではなく、直接にして具体的なる実在は意志の形式を具して居ると云ふのである。客観的に力といふものを考へるのは却つて意志の射影を見るに過ぎないと思ふのである。主客合一の創造的眞実在は意志であり、行為である。認識対象の世界はその抽象的一面に過ぎない。我々の自覚は此の如き意志の形式を明にするものであつて、一面に於て自己が自己を知ることとは他面に於て行為であり、創造である。我々の意志的行為も一方に於て知なると共に一方に於て行である。行なくして知といふことなく、知なくして行はない。知なき行為は単なる運動に過ぎないのである。理性の立場といふのは、我々が自覚に於て無限に自己を省みる如く、超越的意志が無限に深く自己の内に省みる反省的方面であつて、超越的意志はかゝる理性の世界を包含して、更に無限に創造的なる己自身の世界を有つて居る。是に於て自然界の上に藝術道德宗教の文化現象の世界が成立するのである。私の知識以上の意志の世界といふのは単なる無意識と混同せられ度くない。普通の無意識といふのは矢張り意識の対象化である、知識を離れた意志である、物力と拮ふ所はない。眞の意志は明なる知的内容を含んだものでなければならぬ、理性を含んだものでなければならぬ。眞の神秘は徹底せる理性の上に立たねばならぬ、反理性的なる神秘は即迷信である。私の意志といふのはショーペンハウエルの云ふ如き盲目的意志ではない、文化的意志である。盲目的に働くものは物力であつて意志ではない。或は私の意志といふのはヘーゲルの理性といふのと同様ではないかと云ふ人もあるかも知れない。私はヘーゲルのディヤレクチックに於て理性自身が自己矛盾によつて新なる綜合的内

容を得来ると云ふ所を意志の創造と考へる。特に私はヘーゲルの論理より自然哲学に移る所に意志的統一の深き体験の自省なくして内面的推移を見出し得ないと思ふ。併し私はヘーゲルの理性はその語の示す如く矢張り理性であつて、知的に偏して居ると考へる。私は理性の背後に於ける情意的内容を一層深く濃く鮮に見たいと思ふ。

最後に私の超越的意志（これは先験的といつた方がよいかも知れぬが）といふのは、誰の意志でもない一般的な抽象的な意志と解せられたくない。意志は何処までも個性的でなければならぬ。誰の意志でもない一般的意志といふ如き意志は意志ではない。併し意志はかういふことを云ふ人々の考へる様に、単に特殊的不是な。単に特殊的なものは、認識対象界に於て限定せられた或一点といふ如きものであつて、意志ではない。意志は特殊の中に一般を含んたものである。知識に於ては一般の中に特殊を含むと考へられるが、意志に於ては特殊の中に一般を含むと考へねばならぬ。之によつて意志は知識を包含して創造的となることができるのである。私の超個人的といふのは知識の対象として考へられた即ち対象化せられた個人を超越するといふ意味である。対象化せられた個人は個物と扱ふ所はないと思ふ。意志の対象界に於ては互に目的其物となることが一つに統一せられることである。

此論文は詳細なる私の考の意義や証明を目的としたものではない。唯話す代りに書い「た」<sup>(た)</sup>までである。

#### 付記(一)

『西田幾多郎全集』はその第三刷（一九七八—一九八〇）において、それまで未収載であつた西田博士の論稿や書簡の採録につとめ、増補の分量はかなりのものになっている。しかし、こういう大全集には不可避のこととして、なおも収載洩れの小文の散在することが茅野良男氏の諸報告（『本』、一九八二年十月号および十二月号、『創文』、一九八三年三月号）からも窺える。本号（『哲学研究』、五五一号）に掲載するものは、『改造』大正十一年九月増大号に載つた「私の主意主義の意味」である。

この論文の原草稿を茅野氏は金沢・宇ノ気町の西田記念館で発見され、上記『創文』で報告されたのである。もっとも、西田博士の原稿では末尾のところが「唯話す代りに書い(た)までである」となっているが、『改造』誌上ではその文面は「唯その誤解せられ易い点を多少弁明したまでである」に変えられている。従って、もとは何かの講演を念頭において書かれたものとも思われる。

この他につい最近、『智山学報』という雑誌に西田博士の論稿で全集未収載のものが五点も載っているのが見つかった。すなわち一、「ヤコップ・ベーム」、二、「哲学のアポロジ」、三、「アウグスチヌスの三位一体論」、四、「現今の理想主義に就て」、五、「ボードレールの異国人」である。『智山学報』は真言宗智山派(総本山は智積院)で大正三年から同十四年の間に十三号まで発行されて廃刊になり、昭和四年からの『新智山学報』にひき継がれた。但し復刻版が昭和五十八年に刊行されている。

上記五点の論稿は次回の『哲学研究』五五二号に掲載される予定である。その折りにこの『智山学報』なるものと西田博士との関係や、これらの論稿を発見するに到った経緯を少し詳しく報告することにした。本号では、この経緯の中でそれぞれご協力下さった智積院教学部課長・小宮一雄氏、千葉県見徳寺住職・青木真人氏、西田記念館々長・上杉知行氏、大谷大学宗教学助教授・堀尾孟氏、の各位に心からの御礼を申し上げるにとどめる。

(京都工芸繊維大学工芸学部「哲学」教授 大橋良介へおおはし・りょうすけ)

## 付記(二)

前記のやうに、本稿は大正十一年(一九二二年)九月にいったん公刊された。しかし、そのうち該掲載誌が廃刊になったうへ、三たび版を重ねた全集にも収載されてゐないなど、現在ではその存在すら忘れられてゐる。本誌は、各方面とも協議し、西田哲学の研究者および一般読者のため、より適切な場所に収載されるまでの暫定的資料として、遺稿そのまま『改造』掲載のもの(と僅かな差異がある)をここに収めた。なほ、「」内は編輯者の補足である。(編輯者)